

コンサルタントから見たピアノ教室 内山 力氏

我々コンサルタントの世界では「コーチング」という理論が脚光をあびている。コーチングとは日本語でいえば「助言」であり、「教育」「指導」ではない。何か目標を持った人に対して、その目標を達成しうる力をすでに持っている人がアドバイスし、本人の力で目標に到達するための考え方である。コンサルタントは「経営者に何かを教えるのではなく、経営がうまくいくための情報を提供していくことにある。」というのが我々の出した結論である。

中高年者向けのパソコン教室があちらこちらで開催されている。この教室へ通うビジネスマンは真剣ではあるが、どこか暗い感じがする。彼らは「何とかITの進歩に追いつこう」と考えてこの教室で「修行」している。一方、小学校にパソコンが導入され、子供たちはゲーム機に触れるような感覚で楽しんでいる。上達のスピードはまちまちであるが、いつのまにかパソコンの操作を修得している。ここで出来の悪い教師はキーボードの並び方、打ち方から始まって、上達のためのカリキュラムを組もうとする。賢い教師はテーマだけを与えて子供に自由に使わせ、うまく操作できなくなったらアドバイスしてあげる。

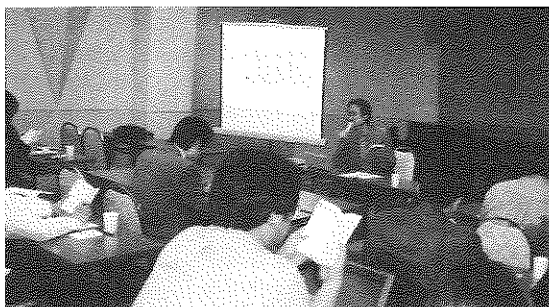
ピアノ教室も「ピアノを弾き、それを真剣に聴いてくれる人がいる」という空間の提供だと思う。自由にそして楽しく弾かせ、うまくいかなかった時にアドバイスを与えるのがあるべき姿だと思う。

こう考えると今ピアノ教室に求められるものは2つ

に絞られると思う。1つは楽しむための空間演出である。どうすれば生徒が楽しく、そしてプライド・充実感を持ってピアノを弾けるかということである。ホテル、映画館など空間の提供を行ってきた他のサービス業同様に、インテリア、ムード、教師の衣装・・・などピアノインストラクション以外のサービス要素に目を向ける必要があると思う。

2つ目は、ピアノ教師からピアノコーチへの変身である。自分の技術を教え込むのではなく、生徒が自分で上達するための手助けをすることである。そして生徒を顧客として、父兄をそのスポンサーとして見ることができた時、このコーチビジネスのサクセスストーリーが誕生すると思う。

うちやま・つとむ◎東京工業大学理学情報科卒業。日本ビジネスコンサルタント（現日立情報システムズ）入社。1988年、中小企業診断士登録。現在、株式会社エム・シー・システム研究所代表取締役。産能大学講師。システム監査技術者、特種情報処理技術者。「ビジュアル・IT活用の実例（日経文庫）」ほか著書多数。



当協会本部事務局内で行われたスタッフ研修会で内山氏にご講演頂いた。(2001.6.22)

●エピソード

ピアノ指導者のリーダーシップとは何か、というやや漠然とした切り口から始めた取材だったが、ピアノ指導のプロとしての意識の持ち方・具体的な行動の取り方、というところに落ち着いたかのように思われる。

ケーススタディを順にお読みいただければおわかりになることと思われるが、若手の指導者がキャリアアップしてピアノ教室を拡大する過程には様々なスタンスが存在し、それぞれの先生の長所が、他の教室とは違った切り口からのレッスンのあり方を実践し、様々な角度から、指導の現場を補強している。優れたノウハウやポリシーが渾然一体化し、満ちている状態、これがピティナの理想的な組織像、と言えるだろう。

ピティナ本部事務局では、スタッフの視野を広げる一助として、音楽業界外で活躍している最先端の一流人を招いたスタッフ研修を実施している。今回の特集記事に向けて、研修の講師をお務めいただいたお二人の先生に、ピアノ指導者へのメッセージとして、コラムをお書きいただいた。ビジネスのプロと理学博士の経済学者。嘖めば嘖むほど「プロの視点」がおわかりいただけるのではないかと思います。



これからの学習理論 西山 賢一氏

いま「学習」の研究がホットです。徒弟制を見直したり、道具の役割が注目されたり、さらには学習の場を多様な人たちが関わる「ポリフォニー」としてとらえ直そうとしています。2

1世紀は「グローバルな学習社会」の時代であり、知識社会になっていくと考えられています。そのための基礎固めが始まっているのです。

そうしたなかでもとくに私が注目している2つの研究について、簡単にご紹介しましょう。言葉にするとやや難しくなりますが、徒弟制を発展させた「正統的周辺参加（認めあった上で周辺から参加する）の理論」と、「道具の役割に注目する教育理論」です。

「正統的周辺参加の理論」では、学習は実践の場（学習の成果を確認できる共同体）へ参加する過程として位置づけられます。初めは周辺的な参加で、だんだん関わりを深め、複雑さを増し、学習することの核心へと迫っていきます。このときの指導者と教材は、ホンモノの世界、つまりあるべき「円熟した実践」とは何であるかを示して、ホンモノの世界へ参加するための道筋を整えることが役割となります。これは、従来のような、教室という隔離された「実験室」で、そこでしか通用しないような「できあいの知」を教師から生徒へ一方的に伝えるスタイルとは、根本的に違っています。ピアノ指導者の世界では、当たり前のことかもしれませんが、小学校に始まる教育の場を、こうした新しい理論で作直そうとする動きが、世界的に生まれてきています。私はこの理論を手がかりにして、

ささやかな実験をしているところです。

もうひとつの教育理論は、学習という活動のかがしが、「媒介項」すなわち学習を補助する手段にあるところがポイントです。ピアノの指導でも、先生が生徒を教えるとき、適切な段階で、適切な道具や教材を使うことが大切です。道具だけでなく、どういう言葉で表現するかもかぎになります。徒弟制の世界では、その世界に固有のことばが「わざ言葉」として使われています。私たちには、自分ひとりのできる領域と、周りから助けてもらえばできる領域があります。この教育理論では、リーダーは適切な道具や記号システムを工夫することで、「周りから助けてもらえばできる領域」に働きかけて、学習者がその領域を「自分でできる領域」に繰り込むのを助けるのだと、主張しています。

私も大学の教員として学習社会に関わっていて、なんとかこれまでの固定的な大学の場を再構築していきたいと考えています。そのために寺子屋のような集まりを実験したり、大学に限らずビジネス、芸術、行政など、さまざまな場でリーダーとして活躍している人たちと交流しながら、変革の手がかりを求めているところです。これからの学習社会、知識社会が大きく発展していくためには、リーダーたちが学習の理論をしっかりとおぼえていくことが、なによりも大切だと思います。

にしやま・けんいち◎京都大学理学部卒。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。京都大学理学博士。九州大学理学部助手、東京大学薬学部講師、帝京大学経済学部教授、国際大学教授を経て、現在埼玉大学経済学部教授。

実際には、リーダーシップを発揮する側だけではなく、それを受ける側の立場（フォロワーシップ）にも興味深い事実が隠されていることと思われる。さらには、ピアノ教室の重要なイベントである発表会のノウハウについても紹介するスペースを設けることができなかつたし、音楽大学の実態や一般の教育機関での現状についても言及できなかつた。

各地のピティナの支部・連絡所が地域の指導者をまとめていく秘訣は何なのか、そもそもピティナという組織全体が音楽界に及ぼすリーダーシップとは何か、といった点に思い至ったところで紙面が尽きた。むしろ大きな宿題を与えられた第1章ということで、あらためて考察する機会をいただければ幸いです。（堀 明久）